英語教育と英文法・英語学の接点：接続詞指導への示唆

主濱　祐二

1　はじめに

本稿は、英語を外国語として学んでいる高校生相当の学生が英作文で用いた文（節）同士を繋ぐ接続詞の分析を通して、学習英文法の一項目としての接続詞の位置付けと英作文指導の在り方について再考し、英語教育における英文法・英語学の接点を探ることを目的とする。

本稿で対象とする学生は、高専（高等専門学校の略称）に所属する高校2年生相当の学生である。高専では、社会で即戦力になる技術者を養成するため、高校1年次から大学2年次に当たる5年間の一貫教育が行われている。近年は「国際的に活躍できる技術者の育成」という社会のニーズに応えるべく、国際交流や英語教育も積極的に推進されている。

英語教育に関して、例えば筆者の勤務する高専では、実験内容についての英語ポスター発表、卒業研究の英文要旨作成、学生によっては国際学会での発表など、高学年になると科学英語を実際に使う機会が増えていく。学年進行に合わせて学習内容の専門性が徐々に高まるとともに、それを表現するための高度な英語力も求められることになる。

筆者は主に低学年の授業を担当しているため、高学年で求められる「英語で専門的な内容について概要をまとめ説明できる」技能水準に達するには、低学年でどのようなスキルや文法項目を習得させるべきかを念頭に置き指導するよう心掛けている。論文添削指導や会話指導と面接試験の経験から、最近は特に、事実や意見を基本的な語彙と簡潔な文構造で書くことができ、それを「P だと思う。なぜなら Q だからだ」「P だ。しかし Q でもある。ゆえに R である」のような論理関係のもとで伝えられるスキルの習得が重要であると考える。

こうしたスキルと文法項目との接点について考えると、事実と意見、あるいは事実同士の関係を明確に示すためには、接続詞を適切に用いて複数の文を繋ぐ必要性が生じる（注1）。そこで本稿では、筆者が平成27年度指導した高専本科2年の学生が書いた自由英作文に見られる接続詞を観察し、その種類、使用の傾向や誤用例から、接続詞や英作文を指導する際の留意点やより良い指導の在り方について、英文法論や英語学研究の知見も取り入れながら考察を加える。

2 方法

筆者の勤務校で、2016 年 2 月下旬に本科 2 年生（高校 2 年生に相当）を対象に実施した「英語Ⅱ」の定期試験において、受講学生の英語ライティング能力を測定・評価するために、下の(1)に示す設問を出題した（注２）。

(1) [6] 下のテーマから１つ選び、解答欄が十分に埋まる程度英語で書きなさい。
テーマ１： Lesson 10（上の大問[5]の英文）を読んで考えたこと
テーマ２： 春休み中、あるいは今後 1, 2 年の間に挑戦（努力）しようと思っていること
テーマ３： 過去に努力の末できたこと、その感想やそこから学んだこと

英作文の解答欄は 5 行で、およそ 50～60 語書ける程度の大きさである。3 つのテーマについては、どれも学生は一度授業中に書く練習をしたことがあったが、個別添削は行わず、模範解答を示し、よく書けていた学生の例を紹介し全体で確認する程度にとどめた。(1)以外の設問数（大問[1]～[5]）も調整し、50 分の制限時間内で(1)の英作文に 10～15 分は時間をかけられるよう配慮した。

定期試験を受験した学生は 116 名おり、2016 年 2 月上旬に実施した外部試験の結果から、およそ 8 割の学生が英検準 2 級相当の英語力があることが分かっていた（注３）。英作文のサンプル収集については、受験者 116 名の答案のうち、(1)の問題に無回答あるいは数語しか書けず１文に満たなかった 14 名分は除外し、それ以外の 102 名分を収集対象とした。英作文中で用いられた接続詞の種類、使用頻度、使用される文脈や前後の要素について調査した。サンプルの一例として、テーマ 2 について書いた学生の文章を図 1 に示す。

I want to try studying English in spring vocation because I don't study it in these days. And I want to go abroad in the future, So, it is necessary for me to study English. I'm going to do not only my homework but also other English textbook, And I will contine to do them.

図 1 英作文サンプルの一例

図 1 の英文では接続詞として because, and, so が用いられている。このような文（節）を後接したり 2 文を繋ぎ 1 文にしたりする接続詞を抽出した。

3　結果と分析

英文中で用いられた接続詞の種類、使用頻度と観察された数を表 1 に示す。

頻度	接続詞	回数	頻度	接続詞	回数
1	so	60	6	if	13
2	because	48	7	when	8
3	(think) that	47	他	関係詞 that や which, after, however, before, while など	
4	but	37			
5	and	24	合計		261

表 1　接続詞の種類と使用頻度

全部で 261 例の接続詞が観察され、中でも so が 60 例と最も多く用いられていた。次いで because が 48 例、think などに続く that（省略されている場合も含む）が 47 例、but が 37 例、and が 24 例観察された。if や when は 10 例程度と少なく、その他 before, after, 関係詞などの使用はわずか数例であった。

以下、特に使用頻度の高かった 5 種類の接続詞に着目し、それらが学生の英作文で実際に用いられる際の特徴を観察しながら、文法指導や英作文指導で接続詞を扱う場合の留意点について考察する。

3．1　等位接続詞 so, but, and

接続詞は一般的に、等位接続詞と従属接続詞に分類され、以下で主に取り上げる接続詞のうち、so, but, and は等位接続詞、because と(think) that は従属接続詞にそれぞれ分類される。まず、等位接続詞 so, but, and の例を観察する。

3．1．1　傾向

学生の英作文サンプルで用いられた so, but, and の典型的な例を 3 つ、(2)に示す（注 4）。

(2) a.　I want win and make a lot of goals.　<u>So</u>, I will practice very hard.　<u>But</u> I bought a guitar last year.　I have a chance standing a stage in school festival.　<u>So</u>, I will practice very hard too.

b.　I will play basketball with new friends every day in there.　<u>And</u>, I will study English and Singapole culture in there.

c. I didn't get high score on test this year. So, I want to finish my spring vacation homework early. And I want to study when I learned something in one grade student.

(2)では、so, but, and はすべて単文の文頭で、頻繁にコンマを伴って用いられている。これが、サンプル中の so, but, and の多くの例に共通する顕著な特徴であり、(3)のように文と文を繋いでいる例は 12 例だけであった。

(3) a. I want to practice table tennis hard in spring vacation, but I have to go home in Yuza during spring vacation.
b. My vacation is playing games every day and play game is about twelve hour.

3．1．2 順接と逆接

等位接続詞には順接と逆接の基本的な用法があり、so と and は順接、but は逆接の関係で 2 つの文が表す出来事を結びつける機能がある。

(4) a. The car stopped and the driver got out.
b. The water was dirty, so we didn't go swimming.
c. I bought a newspaper, but I didn't read it.

(Murphy 1993, p. 204, 下線筆者)

(4a)では、「車が停まった」「（その後、その車から）運転手が出てきた」という 2 つの出来事の順序が、and により保証されている。(4b)の so は、その前節「水が汚かった」ことが理由で、後節「私たちは泳ぎに行かなかった」ことが結果的に起こったという、2 つの出来事の因果関係を表している。(4c)の but は、前節の出来事「新聞を一部買った」が起こったなら、常識的には次にそれを読み内容を知ることが予想されるが、それに反して後節の「私はそれを読まなかった」という事態になったという、2 つの出来事間の推論の不成立を表している。

3．1．1で述べたとおり、学生は複文でなく単文の文頭で so, but, and を用いる傾向が強いものの、それらの前後 2 文の関係については、(4)で概観した基本的な用法に即して、2 文を論理的に結びつけていた。しかし、2 文の関係が捉えにくい文も数例見受けられた。(5)にその一例を示す。

(5) I go to school by my mother driving every winter. But my mother said that "Gateway of school is crowded every morning! ...

(5)は「私は毎年冬は母の運転で登校するが、母は校門が毎朝混んでいると不満を言っていた」という意味の英文であると推察される。実際、この意味内容には逆接が含まれていない（注５）。しかし、この英文を書いた学生は「～するが、母は・・・」のように日本語の「が」のような接続助詞を含む日本語文をまず想起し、それを英語に直していく過程で、前後の文の論理関係を考慮せずに「が」をbutに置き換えてしまった可能性が高い。

大井・伊藤(2006)は、このような日本語の「が」をbutに対応させる誤りは、日本語をそのまま英訳しようとするときに陥り易い誤りの一つであると指摘し、(6)のように「が」が逆接を示さず「前置き」として使われる場合は、butを対応させるのは誤りであると説明している。

(6) 外へ散歩にでかけますが、君も一緒に来ませんか。
× I will go outside for a walk, but won't you come with me?
○ I will go outside for a walk. Won't you come with me?
(大井・伊藤 2006, p. 124)

(5)の誤りが前置きを表す「が」をbutに対応させたことに起因するならば、(5)は例えば次の(7)のようにbutを用いない英文に書き改められるであろう。

(7) In winter my mother takes me to school by car. She has always complained that the area by the school gate is so crowded with students and cars every morning.

以上本節では、学生の英作文中のso, but, andの用法を観察し、単文の文頭に置かれる傾向が顕著であること、また、butの誤用例から、論理関係を無視して日本語の接続助詞を英語の接続詞に直接置き換えられないことを確認した。

３．２　従属接続詞

次に、英作文サンプル中で用いられた従属接続詞の例を観察する。本節では使用頻度の高いbecauseと、thinkなどに後続するthatの２つに焦点を当てる。

3．2．1 Because

学生の英作文サンプルで用いられた because の典型的な例を 3 つ、(8)に示す。

(8) a. I want to practice basketball in spring vacation. Because my friend is two times better than me.

b. I would like to study abroad after a year. Because, I want to know the other clutures.

c. I want to chalenge triaslon. Because It is hard.

(8a)では、because が単文の文頭に置かれ、前の文の理由を表している。これがサンプル中の because の例で最も頻繁に見られる特徴であった。(8b)のように because にコンマを付ける例も多く、数は少ないが(8c)のように because の後の単語を大文字で始める例も数例あった。because が文中に置かれ、後節が前節の理由を示している例は非常に少なく、(9)に示す 2 例のみであった。

(9) a. I want to play the drums because I have already played the guitar, the base, and the piano.

b. I want to try studying English in spring vacation because I don't study it in these days.

英作文で because などの従属接続詞を用いる場合、(9)のように文中で前後の節を繋ぐのが適切な用法であると一般に考えられている。学習英文法では中学校 2 年生頃に when, if, (think) that などの従属接続詞に続いて because が導入されるようである。例えばある検定教科書では、because の用法について(10)に示すキーセンテンスを挙げて解説している。

(10) a. Why are you giving me beans? – Because it's *Setsubun.*

「Why～?で聞かれて、Because～.で答えるというのは、会話特有の使い方です。」

b. You have to hang it like the letter "U" **because** it can hold good luck inside.

「because は when, if などと同じように文の中で使います。Because～.と単独で使うのは、Why～?の質問に答えるときだけです。」

(ONE WORLD English Course 2, p. 94, p.96)

(10)で説明されているように、because を文頭に置く単文は、会話特有の言い方であるため、自分の考えを具体例や理由を添えて表現する今回の英作文問題の場合は適切ではなく、やはり(10b)のように文中で because を用いるよう指導することが望ましいと思われる。

同様の理由で、等位接続詞を単文の文頭に置く用法（3.1.1 を参照）も英作文には適さないと指摘されることが多いが、この点については最近の解釈にも触れつつ４節で改めて取り上げることにする。

３．２．２ That

動詞に後続し節を形成する that の例は、that が省略されている例も含めて 47 あり、say を用いた一例（3.1.2 の(5)）を除いて全て I think (that)の構文が用いられていた。(11)に典型的な例を示す。

(11) a. <u>I think that</u> what I should do is to study hard.
b. I want them to come to table tennis club. <u>I think</u> we should held meeting.

多くの例で、I think の後に主語・定形動詞の語順で節が続いていたが、(12)に示すような主語を欠き動詞が定形でない不完全な節が I think/thought に後続している文も 5 例あった。例文中の下線は、本来主語が現れるべき箇所を示している。

(12) a. I thought _ get the good score so I studied harder and I got a good score.
b. During the spring vacation, I think _ try studying English.

ここで、一例のみ詳細に観察しておきたい。例えば(12a)は、「私は（試験で）良い点が取れると思ったので、より一生懸命勉強し、良い点を取った」という内容を意図した英文であると思われる。日本語では、「私は［良い点が取れる］と思った」のような文が普通で、文脈から明らかであれば「私は［<u>私が</u>良い点が取れる］と思った」のように敢えて「と」節の主語を明示する必要がない。他方、英語では that 節に代表される定形節では主語と定形動詞は必須であるため欠くことができない。英文を書く際この節構造の原則に無知であると、「私は(I)［よい点が取れる(get (the) good score)］と思った(thought)」という日本語直訳的な発想から、"I thought get the good score" という従属節の主語を欠く(12a)のような

英文ができてしまう。主語を補い文全体を整えると、(12a)は(13)のように書き改めることができる。

(13) I thought (that) I could get a better score on the test, so I studied harder and finally got a good score.

think (that)に関連する「日本語直訳的な発想」でもう一点取り上げておきたいのは、I think I want to という表現である。この表現を用いた英文は 8 例あったが、そのうち 2 例を(14)に示す。

(14) a. I think I want to remember many English words for this year.
b. I think I want to play guitar in school festival live with my band members.

このI think I want to は、日本語の「～したい」と「～と思う」に相当する英語表現 want to とI think から作られた、「～したいと思う」という意味の表現であると推測できる。実際このI think I want to という表現は「～したいと思う」という日本語の意味には対応しておらず、母語話者にはむしろ「そうしたい気持ちはあると思うが、その気持ちは本当かどうか自信がない」という非常に優柔不断な言い回しとして解釈されるようである（パーカー, 2016）。従って、(14)の例では単にI want to を用いればよく、I think I want to を用いるのは誤りである。この点は、want to を用いて自分のしたい（したくない）ことを表現する練習をさせる際にあらかじめ注意しておきたい点である。

以上本節では、学生の英作文中の従属接続詞のうち because と that に焦点を当て、because は単文の文頭に置かれる傾向が顕著であるが、英作文の場合は文中で 2 つの節と繋ぐよう指導することが適切であること、また that については、日本語直訳的な発想から従属節の主語を省略したり、「～したいと思う」をI think (that)を加えて誤って訳したりする傾向があり注意を要することを確認した。

4 考察

前節で、学生の英作文サンプルで接続詞(so, and, but, because)が単文の文頭に置かれる頻度が非常に高いことを観察し、この用法について 3.2.1 節の終わりに「英作文の場合適切であるとは言えない」という見解を示した。この用法について、最近の論考も参考にしながら、ここでもう少し詳細に検討してみたい。

4．1　等位接続詞

英語を母語とする幼い書き手は、(15)のように and などの等位接続詞で単文を一文ずつ付け足して文章を書く発達段階を経ることがあるようである。この例では、行動や出来事が次々に起こる時間的連続性が and により表されている。

(15) My parents and I bought a dog last Saturday. And he was a mutt. And we bought him at the pet store. And I called him Superdog because I wanted him to have a cool name. And…（以下省略）

(Thomason and Ward, 2009, p.76, 下線筆者)

読み手に文章が幼稚で洗練されていない印象を与える恐れがあることが、(15)のように接続詞を文頭に置く書き方が形式的な文章で避けられる理由であると考えられる（注6）。

しかし、Thomason and Ward は教える側のジレンマも指摘する：「問題なのは、プロの書き手も and や but で文をよく始めていることであり、新聞や広告などで日常的に目にするだけに、（英語母語話者の）子どもたちにはそうしてはいけない、とは指導しにくい」（p. 77, 筆者訳）。ここで重要なのは、プロの書き手や母語話者がその用法で伝える効果である。(16)の 2 例を比較してみよう。

(16) a. I love my dog, but I can't get her to obey me.
　　 b. I love my dog. But I can't get her to obey me.

(Thomason and Ward, 2009, p.77, 下線筆者)

Thomason らによると、前節と後節が but で結びつけられた(16a)では前節の「飼い犬を愛していること」が強調され、独立した 2 文を but で関連付けた(16b)では後の文の「飼い犬が飼い主に従わないこと」が強調されるという。書き手の立場で言えば、いかに飼い犬が好きか伝えたい書き手は(16a)の複文構造を、いかに扱いづらく困った犬かを伝えたい書き手は(16b)の単文並列構造を選ぶということである（注7）。

実際に中学生や高校生に接続詞の用法や英作文を教える場面で、(16)で見た構文と強調箇所の違いまで意識して指導する必要はないと思われるが、学生が何を強調（対比）する意図で but を用いたか意識させたり、特別な意図がなく短い文が連続する場合は接続詞の使用を促したりするなどの指導は必要であろう。

4．2　従属接続詞

等位接続詞と比較すると、英作文で because などの従属接続詞を単文の文頭に置く用例（3.2.1 節の(8)を参照）を（(16b)の But の例のように）少しでも容認する立場を取る文法解説はないと思われる。Waugh, Warner and Waugh (2015) では、(17)に挙げる例を用いて従属節と主節の関係が解説されている。

(17) a. And so, after a long journey, Fred finally arrived at his destination.
b. Because I like bananas, I eat them every day.
c. Because it would not work.
d. But for Hart (Waugh et. al, 2015, p. 155)

前掲書は、英語圏の小学校教員向けの文法指導参考書である。解説によると、接続詞で文を始めないよう指導するとき、それは(17c), (d)のようなチャンクを避けさせることが狙いのようである。(a), (b)と(c), (d)の違いは、(a), (b)はそれ自体独立した文で明確な意味を伝えられるが、(c), (d)は「何について」そう述べているか不明なため、節を補う必要があるという点である。(c)については、それがどうしても動かなかったのでどうしたのか、(d)は前置詞句であるが、もしハートがいなければどうなっていたのか、主要な出来事について述べる節、すなわち主節が欠けている。

(17c), (d)に主節を加えた文を、それぞれ(18a), (b)に示す。

(18) a. Because it would not work, <u>Daniel took his watch back to the shop</u>.
b. But for Hart, <u>England would have lost by five goals to nil</u>.
(Waugh et. al, 2015, p. 155, 下線筆者)

(18)の下線部は主節を指している。ここで重要な点であり、かつ今回英作文を書いた学生に再認識させるべきことは、「because などで導かれる従属節は、主節と共起しなければ文として成立しない」ということである。“Because I want to study abroad.”のように because の単文を多用する「会話作文」の段階から、「意見文」「説明文」などより高度な英文が書ける段階へとステップアップさせるには、主節と従属節から成る複文の基本構成に習熟させる必要がある。

4．3　節の連結：日英語比較

because や that を用いて主節と従属節を連結させて複文を作るという英語の文

構成法は、日本語を母語とする英語学習者には多少習得が難しい知識であるのかもしれない。そう推察する理由は、英語と日本語で複数の節から成る文構成の原則が異なるからである。

福地(2012)は、日本語では単文節を並置させるのが自然であるのに対し、英語では節と節を主従関係に置く傾向があると、豊富な例を挙げて指摘している。この日英語の違いを図式化すると、(19)のように表すことができる。

(19) a. [　節　] (て) + [　節　]　〈日本語〉
　　 b. [　主節　[　従属節　]]　〈英　語〉

「て」は接続助詞の「て」を表す。(19a)は、日本語では「～し（て）、・・・する」のように節と節を連ねるのが自然な文構成であることを示している。一方(b)は、まず英語では主節を据え、それに補足する形で従属節を付け加えて複文を作る発想である。日英対照の例文を2組、(20)に示す。

(20) a. 少数の人々が政府に強く反対して、政策決定に多くの混乱が生じた。
　　 b. The minority people strongly opposed the government, producing many confusions in policy making.
　　 c. 大雨で洪水が起こり、7人が犠牲となった。
　　 d. Heavy rain caused floods that claimed seven lives.

（福地 2012, p. 220, p. 224, 下線は原文のまま）

(20a), (c)の日本語文は、(19a)と同様に「～し（て）、・・・した」という文構造になっている。日本語文に対応する(20b), (d)の各英文も、まず主節で主要な出来事を述べ、その結果を分詞節(b)や関係詞節(d)を後続させて表しており、(19b)と類似した構造で成り立っている。

単文節を並置させて重文を作る「～し（て）、・・・する」という日本語文の発想から、例えば単に and を用いて"Heavy rain caused floods and seven people were killed."と書いてもよいであろう。しかし、もう少し洗練された、書きことばとしての英語らしさは、(19b)で図示した「節の主従関係」にあると考えられるので、学生には when, if, because などの基本的な接続詞からはじめて、節同士の主従関係を意識させながら、徐々に日本語とは異なる英語の文構成の感覚に慣れさせていくべきであると考える。

本節の考察を終える前に、日英語の文章構造に関する天満(1994)の示唆を取り上げておきたい。天満は日英語の文章構造を比較し、次のように述べている。

(21) 日本語の文章と比較しますと、英語の場合は、論理的に自明な関係には、わざわざ接続詞を用いずに、できるだけ簡潔に文を連結するのが好まれるようです。この点、日本語の文章では、接続詞を多用する傾向があるので注意を要します。（天満 1994, p. 51, 下線筆者）

本稿では今まで学生の接続詞の誤用例をもとに、接続詞や英作文の指導上の留意点について議論してきたが、ここで天満を引用し「英語ではわざわざ接続詞を用いる必要がない」ことを確認するのは、逆接的だと思われるかもしれない。しかし、これはむしろ接続詞の指導の根本を考える上で非常に有益な観点なのである。

接続詞は、複数の文の時間的・論理的関係を表すための言語的手段の一つであり、関係が自明の場合は省略してもよい。従って、接続詞を適切に用いたり、用いなくてよいと判断したりできるということは、複数の文の内容とその相互関係が把握できているということである。

この点を無視して、接続詞を単なる文法項目の一つとして、例えば「"～, and …." "～, but …." "～, so …." このように、接続詞は前の文と後ろの文を繋げます。ではワークで練習してみましょう」と機械的に扱ってしまうと、肝心の"～"と"…"の内容とその時間的・論理的関係について注意を払わないまま、「and は「～と」、but は「しかし」、so は「だから」」とだけ覚えて、学習が終わってしまう。そうではなく、下の(22)に示すように、複数の文の意味の関係を読み取り、適切な接続詞を答えるような、論理を鍛える練習が必要である（注８）。

(22) a. Do you want to play tennis, _____ are you tired?
b. I opened the window _____ it was too hot.
c. It was late _____ I was tired, _____ I went to bed.

もう一点(21)が示唆的であるのは、英文読解と英作文は無関係ではなく、むしろ英文を読み解くスキルは英文を書くスキルに応用可能であるということである。旧来の指導法に倣い、ただ漫然と教科書本文を和訳させるのではなく、ある文とある文の関係（あるいは、自明であるためそこに省略されている接続詞）は何か推測させたり、テーマや主張は何か、それを支持する具体例は何か、結論は何かをコンセプトマップ（概念地図）に書かせ、文章全体の構造を論理的・視覚的に

捉える訓練をさせたりするなど、一貫性のある文章を書くための論理的思考訓練を、英文読解を通して実践することができる。

以上本節では、単文節の文頭に接続詞を置く用法について、最近の論考をもとに等位・従属接続詞それぞれの指導上の留意点を再考し、後半は日英語の複文（重文）の構成法や文章構造の違いから、英文の主従関係の把握や接続詞の学習や英作文・英文読解指導での論理思考訓練の重要性を論じた。

5 まとめ

本稿では、高専2年生102名分の英作文サンプルから文を繋ぐ接続詞を抽出・分析し、接続詞の学習と英作文指導の在り方について、英文法・英語学との接点を探りながら考察を加えた。

使用頻度が特に高いso, and, but（等位接続詞）, because, that（従属接続詞）に着目し、so, and, but, becauseは単文の文頭に置かれる傾向が顕著であること、また、逆接でない文脈でのbutの誤用やI think I want toという適切でない表現の使用から、日本語直訳的な発想に起因する誤りがあること確認した。単文節の文頭に接続詞を置く用法については、幼稚で話し言葉の色合いが強いため避けるべきであるが、特にbecauseなど従属接続詞を単文節の文頭に置くのは文法的に誤りであるため、主節と従属節から成る文構造の復習が必要である。

さらに、日英語比較の観点から、二言語間の複文（重文）構成法や文章構造の違いに基づき、英語の複文構成は節の主従関係が重要であり、接続詞の習得や英作文・英文読解指導での論理トレーニングの必要性も合わせて論じた。

注

1 当然ながら、接続詞を用いて複数の文を繋ぐことが、その内容の論理関係を明確に伝える唯一の手段ではない。この点については4節でさらに言及する。

2 実施科目「英語Ⅱ」では、高等学校「コミュニケーション英語Ⅱ」の検定教科書を主な教材として授業を行った。

3 外部試験には「英検IBA」を利用した。116名中、英検2級程度の英語力がある学生が3名（2.6%）、準2級程度が90名（77.6%）、3級程度が23名（19.8%）という結果であった。

4 これ以降提示する英作文サンプルからの例文には、スペルミスや文法上の誤りが含まれていることがあるが、修正は加えずそのままの英文を提示する。

5 例えば(5)が "... But this winter I got up early and walked to school every

morning." で、「しかし今年の冬は…」のように前文との対比が表されていれば、逆接を含む例であると解釈することができる。

6 ある英文添削専門会社のウェブサイトでも、文頭に but や and などの接続詞を置く文は「ビジネスメールでも避けた方が良い、アカデミックな文章では御法度」であり、修正しなければいけないと指摘されている。
http://www.speedtensaku.com/article/14024211.html (2016年2月20日閲覧)

7 "A, but B" も "A. But B" も論理的に等価であるため非母語話者には意味の違いを見出しにくいが、母語話者にとってはAかBかどちらを強調するかで異なる機能を持つ構文であると言える。従ってこの2つの構文は、意味と形が一対一の対応を成し、形式が違えば意味も異なるという Bolinger (1977) の言語論を支持する一例とも考えられる。

8 (22)の空所に入る接続詞の例は次の通り。a. or b. because c. and, so

参考文献

大井恭子・伊藤文彦. 2006. 『Stop! 日本語的発想 英語で書くコツ教えます』桐原書店

天満美智子. 1994. 『新しい英文読解法』岩波ジュニア新書 246, 岩波書店

パーカー, デビッド. 2016. 『英語と仲直りできる本：ネイティブ講師が教える英語上手の秘訣』アルク

福地肇. 2012. 「英文法と英作文」, 大津由紀雄（編著）『学習英文法を見直したい』, 217-230. 研究社

松本茂・伊東治己・高橋一幸他. 2009. 『ONE WORLD English Course 2』教育出版

Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form.* Longman.

Murphy, Raymond. 1993. *Basic Grammar in Use: Reference and Practice for Students of English.* Cambridge University Press.

Thomason, Tommy and Geoff Ward. 2009. *Tools, Not Rules: Teaching Grammar in the Writing Classroom.* Strategic Book Publishing.

Waugh, David, Claire Warner and Rosemary Waugh. 2015. *Teaching Grammar, Punctuation and Spelling in Primary Schools.* Second edition. Learning Matters.

（岩手大学大学院教育学研究科平成 18 年度修了生、鶴岡工業高等専門学校創造工学科）